

水野雄司著

『本居宣長の思想構造』——その変質の諸相』

(東北大学出版会・二〇一五年)

星山 京子

本書はゆれ動く宣長の心に注目した書である。宣長が思想を構築するプロセスにおいて、その心はどのようにゆらぎ、変化していったのだろうか。宣長が紡ぎ出す言葉の微妙な差異に耳を傾け、その変質の諸相を明らかにすることを目的とした書である。あとがきによれば、本書は著者が二〇一〇年に東北大学大学院文学研究科に提出した博士論文をもとに加筆修正されたものである。

本書の構成は次のようになっている。

序文

第一章 「物の心」と「事の心」——「排蘆小船」から「石上

私淑言」へ

第二章 「真心」と国——「直霊」から「直毘霊」へ

第三章 「物のあはれ」と道——「紫文要領」から「源氏物

語玉の小櫛」へ

第四章 日本書紀本文批評——「書紀の論ひ」から「神代紀

髻華山陰」へ

あとがき

参考文献

附録 「神代紀髻華山陰」批評項目分類一覧

以下、各章の内容をまとめながら、気づいた点を述べていく。序文では、従来までの思想史研究において常套的にとられてきたアプローチ方法について、著者独自の問題意識に基づき、疑問が投げられている。著者は宣長を研究対象とする際、その思想の特質を部分的に取り出して表現した「文献学」、「徹底的日本主義」、「実証主義」等々の用語がよく使われると指摘する。しかしこれは対象とする思想を総体として、内在的に理解しようとする際、ある意味、危険な行為であろう。著者はこう警告する。

ある所定の筋書きにそって宣長を規定しようとする問題史のアプローチにおいては、宣長の言葉は特定の問題意識からつまみ食いの用いられるにとどまり、その思想そのものが全体として、あるいは内在的に論じられることはなかった。思想史や国学といった枠組みから、ある種演繹的に捉えようとする方法では、本当の宣長の内面を把握することは困難である。(三頁)

なるほど「学」、「主義」という言葉はある意味便利で、何らかの「主義」をうたっておけば、妙な安心感が生まれ、対象とする思想を理解しようとする錯覚に陥りがちである。またこう

した定義は、宣長の全体像を理解する前に、ある種の先入観に似た前提を研究者の脳裏に深く刻みつけてしまい、結果、研究对象とする思想の内在的理解を阻んでしまうのだろうか。

著者の論鋒は鋭い。「日本思想史」という総体の理解を目指すことで、宣長一人の思想家としての理解が希薄になっている」(iii頁)とし、こうした状況を生んだ要因の一つとして、長年にわたるテキストの不備が指摘されている。

『本居宣長全集』(筑摩書房)刊行後、今度は「宣長を専門化された研究分野によって細分化することによる問題」(i頁)が生じた。宣長がカバーする学問領域は、国文学、思想史学、倫理学、歴史学、地理学、神道学、言語学、民俗学等、現在の人文系学問のほぼすべてを網羅する。「それぞれの論考は高い意義を持つが、そうしたジャンルの細分化による専門化が進めば進むほど、宣長という人物の全貌の把握は困難になっていく。つまり深化した個別の内在的理解が、総体への統合を困難にしているのである」(iii～iv頁)。研究者各自が専門とする個々の学問分野に引きつけて、宣長の思想の多面的な諸要素をカテゴリー化し、個別に論じるといったアプローチ法がその後、主流となり、個々の成果には意義が見いだせる。しかし、思想全体の理解に近づくことはますます困難になってしまった、という。では「宣長の全体像」に近づくためにはどのような方法論をとればよいと著者はいうのだろうか。「思想史家は原点に立ち戻るべきである。原点に立ち戻るとは、宣長のテキストそのもの

のに耳を傾けることにある。そのためには、分析に使われる概念、たとえば日本思想史という枠組みから付けられた批評語や、研究者自身が所属する学問分野という名前をいったん脇に置く必要がある」(iv頁)。

たしかに「主義」とか「分野」といった分類方法は、宣長自身によるものではなく、あくまで後世の研究者によってなされたものにすぎない。著者は「ありのままの宣長の言葉に向き合うことで、本当に宣長が述べたかったこと、その長い学究生活で目指した目的が顕わになってくる。現在の視点からは各専門に分類される内容も、宣長にとってはひとつの目的の追求による所産」(iv頁)であると、宣長が生涯をかけて追究した「ひとつの目的」とは一体何であったのか、「各時期の宣長の思想の変質を明らかにする」(iv頁)ことでそれを見いだすことが本書の目的である、と述べている。

第一章「物の心」と「事の心」——「排蘆小船」から「石上私淑言」へ」では、『紫文要領』と『石上私淑言』が主に扱われている。これらの書物の中で使用されている「物の心」と「事の心」の語義の分析から見いだせる思想の変化に着目することで、歌論から古道論へ思想の変遷がどのように行われたかについて論究している。

宣長以前の文献において、「物の心」とは「子供から大人への脱却としての感受性」(五五頁)を意味していた。しかし『紫文要領』において「物の心」とは、「はかなき器にても、よ

く造りたるをみてよしと思ふ」(四一頁)、「表面的なものに惑わされずに、そのものの本質をつかみ、良いものか悪いものかを見抜く眼力」(四一頁)である、とその意味が変化している。「いみしくめてたき桜の盛にさきたるを見て、めてたき花と見るは、物の心をしる也」(四一頁)、物事にはあるべき正しい感じ方があり、それが「物の心」であり、つまり「物の心」とは「知識の獲得」(四四―四五頁)を意味するのである。

宣長は美しい満開の桜を見た時、「美しい」と感じるのが「物の心」であり、その美しさに心が震えるほど、感動し涙を流すことが「物のあはれ」であると、両者を明確に区別した。著者は「もともとあつた子供から大人への脱却としての感受性といった側面を、宣長は「物のあはれ」の文脈で展開することで、外部から得る知識としての側面を重視していった。それは、最終的に国という歴史や文化という「事の心」につなげていくための過程であった」(五五頁)、と述べている。

「物の心」の対象を自然の風景とすれば、「事の心」は出来事」(四三頁)であるという。『石上私淑言』では「事の心」に言及している。「喜怒哀楽の感情の源に、「事の心」の知識としての習得があり、その手がかりに「やまと」がある」(五五頁)と著者が述べるように、『石上私淑言』においては、「やまと」という国名の意味や由来が語られている。ここにおいて「事の心」は日本の歴史や日本文化を意味するものとなり、宣長の思想は、歌道論から古道論へ新たな展開をみせた、とする。

第二章「真心」と国——「直霊」から「直毘霊」へ」では、『直毘霊』から『直霊』への改稿に焦点をあてている。『直毘霊』と『直霊』の間には約二十年もの長い年月が流れていることに著者は着目、その思想的差違を論じている。

『直霊』で宣長は、近年、人々の心は「からころ」に染まってしまうが、古典を読むことによって、古えの日本に存在した「至善のころ」を獲得することができるとした。しかしこうした人間に対するいわば樂觀論は、『直毘霊』において影をひそめる。この世は測り難く、何が善で、何が悪なのか、それすら判断できないのが人間である、とされ、人や人智に対する懐疑的な見方が表明されている。悪人が榮え、善人が恵まれないといった現実社会に起こる不条理は、禍津日神のしわざであり、人間の力ではどうにもしがたいものであることが強調される。

こうした『直霊』から『直毘霊』への思想の修正について、著者は「古典研究の深化において、「皇国」への絶対的信頼が確立したゆえにおこなわれた」(八七頁)としている。この国の人間は、生来、至善の精神すなわち「真心」を持っているのであり、「その人がするべき行動は、いかに「うまれつきたるままの心」を「漢意」によって損なうことないようにするかだけなのである」(二〇四頁)。

第三章「物のあはれ」と道——「紫文要領」から「源氏物語玉の小櫛」へ」では、古道論研究がすすむにつれ、「物の心」

と「事の心」によって構成されていた「もののあはれ」論が一時的に崩壊していく過程を描いている。第一章で述べているように、『紫文要領』において「物の心」は「もののあはれ」を説明する際の重要なタームとして使われていた。「その「物の心」は、最終的に、国の歴史や文化という「事の心」へとつながっていく。私たちが喜怒哀楽を感じるには、知識としての「事の心」が必要であり、その前提としてわが国が設定される。そのために、よりよい心を得るためにも、国を知る、つまり古事記研究へすすんでいったのである」（一六頁）。

しかし『源氏物語玉の小櫛』では、「物の心」と「事の心」は使用されていない、と著者は指摘する。よりよい心を獲得するためには、心の背景にある自分の国を知らなければならぬ。こうした思考のもと、開始された古事記研究によって、「国への絶対的な信頼」（一四九頁）が宣長の中に確立され、あるがままの「真心」を肯定するようになった。こうして『紫文要領』に見られる「知識の獲得」としての「物の心」は否定され、『源氏物語玉の小櫛』では、「物のあはれ」は、学ぶべき対象から、感じるままに「うごく」「うまれつきたるままの心」に帰っていった」（一四八―一四九頁）のである。

『古事記伝』執筆のプロセスにおいて、「結局「物のあはれ」は、知識ではなく、感受性の発露という、ある意味従来の定義に回帰した」（一四八頁）と著者は結論づけている。従来の研究史において、宣長の思想や独自の文芸論の特質とされる

「もののあはれ」論が一時的にせよ、瓦解していた、という指摘は興味深く、斬新に感じられた。

宣長は漢文で表記された『日本書紀』を批判、古語で書かれた『古事記』こそ第一とすべきとした、と一般的に考えられている。しかし著者はこうした見方に対し反論する。「古語のまま記された『古事記』を古学第一の書とした。しかしそれは書記の否定を意味せず、あくまで『古事記』に対して「次に立る物」という地位を確保していた。よって宣長の『書記』研究とは、『古事記』研究に付随する形で行われ、『古事記伝』は『書記』研究書という側面も同時にもっている」（一五七頁）。第四章「日本書紀本文批評——『書記の論ひ』から「神代紀髻華山陰」へ」では、これまでの研究史の欠を補い、宣長の日本書紀観に再検討を加えている。

具体的には『古事記伝』執筆終了後に著された『神代紀髻華山陰』を取り上げ、『日本書紀』批判がどのような観点から行われたかを明らかにしている。結論部分で著者はこう述べる。「宣長の『書記』批判の大半は、そもそも「漢文」表記に由来するものではなかった。宣長の脳裏に存在する（あるべき文）から導き出される演繹的な方法によって、『日本書紀』本文」は批判されていた。宣長は「漢意」という概念を創り出すことで、古典に関わる「人」への批判を容易にした。それによって実質的には「本文」からしか出てこない「古のつたへごと」を、かなり自由に訓み出す権利を自ら獲得したのである」（一九二

頁)。宣長の『日本書紀』批判の根拠は、書紀に関わった「人」にあった、としている。

以上、本書の内容をまとめながら、気づいた点を記した。宣長の日本書紀観に対する議論や「もののはれ」論が一時的にせよ、宣長内部で瓦解していた、等の指摘は新知見であり、宣長研究における新たな地平を切り拓くものであろう。多面的な思想の一部を切り取って、部分的に論じられることが多かった従来の国学へのアプローチ法を批判し、思想の全体像に近づくことの重要性を強調する、序文で示された著者の提言は、従来の国学研究のみならず、日本思想史研究全体の叙述方法に一石を投じるものと思われる。こうした観点から本書は、チャレンジングな議論を含んだ研究成果であるといっていいたいだろう。

しかし多少の問題もある。本書の中には、議論の展開が少々唐突な印象を受けたり、論理の飛躍と感じられる箇所が若干散見される。例えば、第一章、学問的関心が歌論から古道論へ展開していく過程、宣長が「日本」を考えるようになった経緯についてもう少し精微な論証が必要のように感じた。また著者は序文で、宣長による「ひとつの目的」を見いだす手がかりとして、吉川幸次郎『本居宣長』(筑摩書房、一九七七年)の宣長論を紹介し、「これは宣長学総体の理解としては極めて明解である。「国学」としての性質を担う歌や古道は、この目的を達するためのひとつの学問対象に過ぎない。宣長は、人はどのようには生きるべきかを考え続けた」(iv～v頁)と吉川説を支持、

宣長の「ひとつの目的」とは、人間はどのように生きるべきかを知ることであった、としている。

吉川幸次郎『本居宣長』が、宣長の思想を学ぶ者にとって必読書であることは言うまでもない。評者も多くのことを教えられた者の一人であるが、数ある宣長にかなする論考の中で、著者がなぜ吉川説を支持するのか。その根拠を本書から読み取ることができなかった。第一章以降で行われる時系列に沿ったテキストや語意、語義の緻密な読みよって、宣長の思想展開にみられる微妙な変質を細かく分析、考察した結果、導きだされた著者の結論であるならば、理解できる。しかし宣長の「ひとつの目的」とはなにか、という著者が自ら掲げた大きな命題に対する一つの解答を、序文ですてに出してしまっている理由はなんだろうか。こういう叙述方法もあるのだろうか。少々奇異に感じた。

宣長が使用した用語一つ一つの語意や語義に着目し、厳密なテキストクリティックをもとに分析や考証を積み重ねる。こうした日本思想史研究の原点に立ち返るような著者の対象に対する堅実な手法はきわめて重要である。本書の目的は、あくまで宣長の心の機微や思想の微妙なゆれ動き、「変質の諸相」を解き明かすことにあるのであり、「ひとつの宣長像」を提示したり、再構築することなどは思想の内在的理解を妨げる行為にはかならない、と著者は言われるかもしれない。

またこれに関連して、本書には各章末に「おわりに」が設け

られ、各章の内容にかんする簡単な「まとめ」はあるものの、「終章」もしくは「結章」等、本全体の結論部分がないが、著者は意図的にそうしたのかもしれない。しかし、宣長の心の細微なゆれを検証した結果、総体としての宣長の思想の本質は何か。「新しい宣長像」はどのように描き直されるべきなのか。愚問と言われるのを承知で著者に問いたいと思う。

以上、指摘した内容には評者による誤解や見落としもあるかもしれないし、見当違いな意見を述べてしまったようにも思う。著者の今後の宣長研究のさらなる進展と、本書の続編を期待してやまない。

(兵庫県立大学准教授)

中川未来著

『明治日本の国粹主義思想とアジア』

(吉川弘文館・二〇一六年)

鈴木 啓孝

国粹主義とアジア主義——近代日本においては相反するものとして想起されることも多い二つの思想潮流の交差に対して、本書は新たな理解を試みている。その交差点として、本書は一八九〇年代に活動の最盛期があった東邦協会に注目し、この時期この場を活動拠点として共有した「国粹主義グループ」に属する五人の思想家(稲垣満次郎・志賀重昂・高橋健三・陸羯南・内藤湖南)を素材に、「いかなるアジア認識が、いかにして形成されるのか」(一三頁)を明らかにする、という研究目的を設定する。

近年、政教社や日本新聞社に参集した明治ナショナリズムの担い手たちの、青年期における思想の形成過程に関するまとまった研究成果が出ている一方で、近代日本におけるアジア認識の形成過程に関しては、通時的で包括的な調査に基づく新たな解釈が示されている。明治期の日本ナショナリズムと近代日本